

スナップ写真

中村 龍介

手許に二枚の写真がある。先日、書類整理をしていて偶然見つかった。

一枚は、殺伐とした荒野に立つ妻がじつと前方を見つめている。口許が少し綻んでいるように見えるのは、自分の置かれた現実に満足し、これから起こることにある種の期待感を抱いているからだろう。もう一枚は、三姉妹が道端に並んで絶好調のポーズ。

このスナップは家族全員で初めて海外旅行したときのもの。末娘の四女は妻のお腹の中に居るので、今から四十年ほど前、場所はトルコのデニズリという山の中だ。

当時、私はイスタンブールに単身赴任、家族は日本人学校のあるドイツのデュッセルドルフで生活していた。その年、一九七七年の暮れ、家族をトルコに呼び寄せたのだ。

イスタンブールの空港に、三人娘を従えた、お腹の大きな妻を出迎えた。

「ドイツに較べると随分暖かいわね」

初めてトルコの地にやってきた妻の第一声は気温の違いについてであった。デュッセルドルフは北緯五十一度、樺太の中央部と同じだ。イスタンブールは四十一度、函館と同じ。年末の気温は東京と大差はない。

「朝、出てくる時は零下二十度だったわよ」

「だから、冬の旅行は南に限るよ。明日行くアンタリヤなど地中海の海岸だけど、十度以上あるよ」

「泳げるの？」

後ろから揃って出てきた三人娘の一人が訊いた。

「海じゃ無理だよ」

「お母さんが水着を持って行きなさいというから持って来たのに」

「それはね、海じゃなくて野外温泉があつてね。そこでは、みんな水着で泳いでいるんだ」

「何てところ？ 明日は行かないの？」

「パウムツクカレというところだよ。三十日になるかな」
その日は、十二月二十八日。イスタンブールに一泊して、翌日飛行機で南に飛び、アンタリヤでレンタカーをして西部地帯の観光地を巡る計画だった。

当時はまだ道路整備も不十分で、もちろんナビなどない。石の多い山道に薄くアスファルトだけを敷いた簡易舗装道路には標識が殆んどない。ないない尽くしの中を簡単な地図だけを頼りに車を走らせる。

出発してから二時間以上も殺風景な山道を走り続けてきた。道端に売店もなければ、対向車とも殆んど出会うことがない。ホントにこの道でいいのだろうか、不安を感じて車を停めて外に出てみたところのスナップがこの写真だ。

このとき、私には不安が一杯だった。この道は途中、山の中で途切れてしまうのではないだろうか。また、レンタカーのトルコ製『ムラット』の性能もイマイチ信頼できなかった。いまにエンジンが焼きついて動かなくなるかもしれない。

心配で落ち着かない私とは裏腹に、妻の表情は爽やかだ。一抹の不安も感じていない。この人に任せておけば大丈夫、と大船に乗った積もりでいるようだ。また、娘たちのガッツポーズは、もう直ぐ何かいいことがあると確信しているかのように見える。

この時、私は三十七歳。妻と娘たちの全幅の信頼を両肩に背負っていたように思う。いい時代だったと懐かしさがこみ上げる。まだ、たくさんの可能性が前途に横たわっていた。タイムマシンに乗って、もう一度この時代に帰ってみたい。無理と知りながらも、思う。

後期高齢者となった今は、たくさんあったはずの可能性が一つずつ消えて行き、加齢から来る病魔と闘いながら細々と老いていく自分がある。妻もとつくに先立ってしまった。

偶には、古き良き思い出に浸りながら、そこに自分勝手な脚色を加えて、空想の世界に遊ぶのも高齢者の特権かもしれない。

尚、このスナップ写真の後、ほぼ予定通り最後まで楽しく年末年始旅行の全行程を終えたことを報告しておく。



【二〇一六年八月記 原稿用紙五枚半 自由課題】